

古武雄

～朝鮮陶工・深海宗伝から続く430年の伝統と誇り～

一大産地として

武雄は県内で最も多くの窯跡が残る地域であり、古くから焼物の一大産地であったことがうかがえます。特に、古武雄の器はその芸術性の高さ・美しさから、武家や富豪の間で調度品としても珍重されました。

海外への輸出

古武雄は東南アジアにも輸出され、タイ国立博物館などに収蔵されています。

古武雄が発見された地域



参考：中島 宏「発見 江戸のモダニズム 古武雄」(2010年)

今も進化し続ける武雄の焼物

現在、市内には約80か所の窯元があり、陶器から磁器まで多彩な作品を生み出しています。歴史を大切にしつつ、新しい表現にも挑戦し続ける一それが武雄焼の魅力です。

武雄の焼物の歩みは、ただの「ものづくり」ではありません。大陸から伝わった技と心、武雄の風土と人々の精神が育んできた文化遺産、そして時代を超えて続く地域の誇り。まさに“文化の継承”そのものです。

市民の皆さまにも改めて武雄の焼物の魅力を身近に感じていただけたら幸いです。



インタビュー



黒牟田焼は約400年前から始まり、当時、使われていた湯たんぽやすり鉢などを作っていました。そのような中で、父は先見の明があり、時代に合わせた民芸陶器（日々の生活で使う陶器）を作るようになりました。

4年前に市の異業種交流会で鹿島市を訪れた際、祐徳稲荷神社の宮司さんから「伝統というものは何もしなければ8割はなくなり、2割は何かをすることで残る」という言葉をいただきました。その後、日本酒を飲み比べた時に同行した方から「盃を作ってみませんか？」と要望を受け、作ってみたところ、とても好評でした。これまであったものを守るのが『伝承』、その時代に合わせ新しいものを作るのが『伝統』であると思っています。

私は人との出会いを大切にしています。出会いの中には作品づくりのヒントがあり、それをどう活かしていくかを大事にしています。時代の流れも感じ取りながら、これからも新しい作品づくりに挑戦していきたいと思っています。

黒牟田焼 丸田 宣政 窯

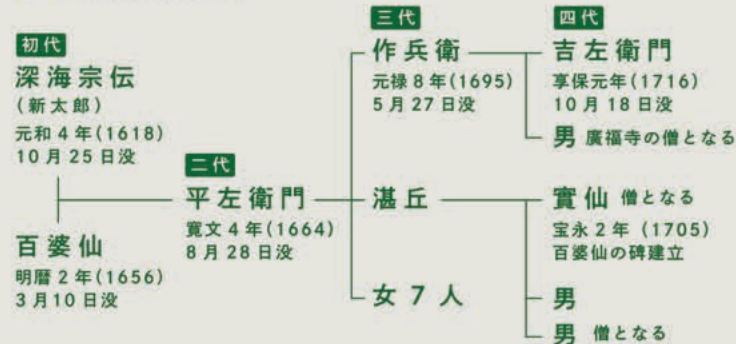
📍 武内町大字真手野 24767 📞 0954-27-2430

伝統を受け継ぐ窯元のひとり

丸田 延親 さん

武雄の焼物の始まり

● 深海宗伝の系譜



武雄と磁器

宗伝らは武内町内田で陶器を作りました。小峠（現在の武内町内田）窯場近くの陶石で磁器も試みましたが、量と質が足りず本格化しませんでした。その後、妻・百婆仙^{ひゃくばせん}が有田へ移り住み、李参平^{りさんぺい}（金ヶ江三兵衛）たちとともに初期の有田焼生産に従事しました。

古武雄様式での生き残り

磁器の人気の高まる中、武雄に残った陶工たちは独自の技法を生み出しました。茶褐色の土に白化粧を施し、緑褐釉で松などを描く大胆な作風です。これが武雄を代表する焼物となり、現在「古武雄^{こだけお}」と呼ばれています。



てつ えりよく さいまつ じゆもん かめ
鉄絵緑彩松樹文甕

年代：1630～1670年代
所蔵：個人蔵



てつ えりよく さいじゆ かもん おおざら
鉄絵緑彩樹花文大皿

年代：1650～1690年代
所蔵：個人蔵